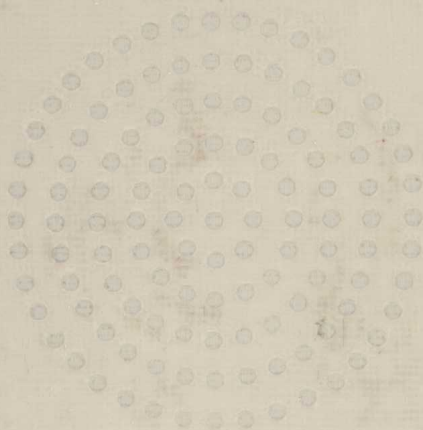
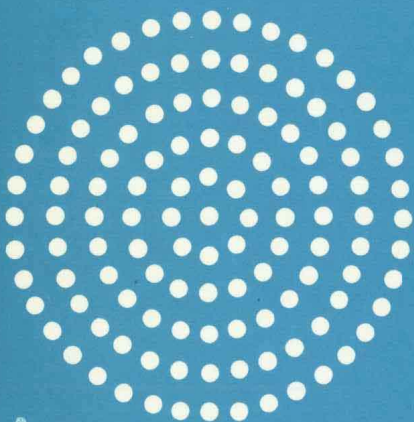




世界の詩集 17

カロッサ詩集



藤原 定訳

訳者 藤原 定

1905年、福井県に生まれる。1930年法政大学
文学部哲学科卒業。詩人・評論家。

〔主要著訳書〕詩集『天地の間』（ハ雲書林）『僕
はいる 僕はいない』（昭森社）、評論『詩の宇
宙』（皆美社）、訳詩集『シュトルム詩集』（角
川書店）、『カロッサ詩集』（弥生書房）



世界の詩集

17

カロッサ詩集

昭和四十七年十二月十日 初版発行

訳者 藤原 定 ふじ かわら さだむ

発行者 角川 源 義

発行所 角川 書店

東京都千代田区富士見二ノ十三
⑤東京一九五二〇八 ⑥一〇二
電話東京（二六）七二二（大代表）

株式会社 写 研

植竹プロセス製版株式会社

暁美術印刷株式会社

三真堂印刷紙器株式会社

株式会社 鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0398-590317-0946(0)

目次



ハサウの町。町役場の時計台が見える。

カロッサ詩集

河辺の森に
家路
ぼくは夜中に
星々の歌
おおじろい月が
体験
あるチョウに
春
もろくなった氷塊が
ベンチにかける見知らぬ女
盲人
水中の天
岸辺の精霊とチョウ
自然に寄す
雷雲の上にあつて
太陽によせる歌
醒めぎわのながめ
出あい
父母の家の庭で
眺め
日の出と老樹

七 汽車は走る
聖女バルバラの日
くらしい時間
トロイメライ
ある子に
不安な夜ののち
地霊
冬の森
病人
なぜぼくらは
死の讃歌
ニウンフェンブルク
ある死者に
浄福への確信
霧
夕やみがしだいに暗く
明けがたの山
受胎
あいさつ
神秘の星 Stella mystica
情熱
愛欲に駆られ
愛の神秘
秘義

五〇 五二 五三 五五 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇 一〇一 一〇二

太陽が沈もうとして
 近よりがたく見えた山の頂きに
 ポートにのつて
 聖者の手の上の小さな町
 祖先の女
 アッピア街道 Via Appia
 ひめやかな風光
 休息
 バラの花は 今どこに？
 ドブロウラニーの少女
 遁走
 生まれてくる子に
 生の讃歌
 断片
 猫に
 ある星が歌う
 おお、時を忘れよ！
 わたしはこの家のかつての子供
 古い泉
 終曲
 生の日
 さまざまな補充
 時代の耕地は

〇六
 〇八
 〇九
 一一
 一六
 一九
 二二
 二四
 二六
 三〇
 三三
 三六
 四〇
 四二
 四四
 四六
 四七
 四九
 五二
 五三
 五五
 五八

林間に照る星 一九四〇—四五年の詩
 ほのぐらい縞模様に染め
 鉄道線路わきの古びた家で
 三月の初め
 鳥のバラッド
 古代の墓のレリーフにささげることば
 林間に照る星
 守護霊
 庭の日
 雲と花
 ある夢想からの眼ざめ
 見しらぬ世界
 小さな読書家
 捕虜の女と老人
 ある夢幻劇の中で光波研究家の霊は
 語る
 死の風に触れ
 完全な代償
 使者
 西欧の悲歌

一九
 二〇
 六
 一四
 一六
 一八
 一七
 一七
 一七
 一七
 一八
 一八
 一八
 一八
 一八
 一九
 一九
 一九
 二〇
 二〇

一九四五―五六年の詩篇

聖なる山

二五

なんにちもぼくは畑を

二七

荒地

二八

ヒヤクニチ草の開花

三〇

早春の庭をあるき

三三

解説

三五

年譜

二五

カロツサ詩集

カ
ロ
ッ
サ
詩
集



パスアの町をのぞむ。

河辺の森に

河辺の森に

朝日がかくれていた。

ぼくらが岸から 乗り出すと

太陽も 河の中へ飛びこんで

きらめく道づれを

流れの上へ おくってくれた。

家路

わが家の庭は もはや明るみ

あの流れは さざめき立ってしましうか？

なおもぼくのいのちは

君の接吻によって燃え

なおもぼくの眼は

君によって明るく

ただ君ばかり 世のありとある魅力の中で

ただ君の魅力だけを飲む。

空からは

夢みる月の いぶきがつたわり、

白い雲ひとつただよっていて

その縁は 天のみどりに融けてゆく。

河は夜のふところから
氷塊を運んでき、
どの氷塊もみな
光の重荷を担っている。

並木道では 豎琴のように
幾条かの電線がざわめき、
車輪のあとが
雪の道にかがやいて

そのかがやき清らかに
君が許へ つれ戻そうとする。
ぼくは知る、君がまだ眠りもせず
深いよろこびに 浸っているのを。

またランプの笠が
ブドウ色に 君の姿を染めているのを。
君は窓の凍てついた氷に
あつい息吹きを吐き入れ、

君の眼ざしは夢みている
とおくこの流れの方を――
今もなお君は
ぼくの接吻によって 生きるいのちだ。



ぼくは夜中に

ぼくは夜中に

よく眼がさめた、

ベッドや戸だなに

月光が あかるくさしてた！

窓のそと 谷の方を見ると

君の家はもうあかるんで夢のよう――

ぼくはまた寝入って 深い夢を見た。

星々の歌

明日こそは たくさん星がかがやくでしょう、
明日こそは ぼくのために君は泣き
黙した窓をうかがうでしょう。

はるか遠くの かがやく空へ

飛びさりたくなるでしょう、

すると あふれる明るい涙をとおして

見るでしょう、無数のしずかな星々が

みな大きくなり 太陽のようにふるえるのを。

あおじろい月が

あおじろい月が そのへりも薄れて
あかるい昼の風景の上にかかっていた。

水を飲もうとして谷あいへゆくと

月はひそかな光をつよめ 白銀にかがやき出した。

そして深くてくらしい泉の底では

たそがれ時のように 月は光っていた。